

## 甲子プロジェクト 2022 報告—夏目漱石と “Sartor Resartus”

生活美学研究所研究員 黒田智子

### 1. はじめに

“Sartor Resartus”（以下 SR と略記）は、文学者であり歴史家でもあったトマス・カーライルの思想的文学作品である。18 世紀のイギリスで、産業革命により資本主義経済が発展し、功利主義と科学的思考に影響を受けライフスタイルや価値観が変化する中、教会から離れていった 19 世紀の知識人の心のよりどころとなったといわれている。一方、明治維新により、士農工商が廃止され刀と鬘と礼装としての着物を捨てねばならなかった日本では、廃仏毀釈と近代化の中で、イギリスに勝るとも劣らず心の拠り所を失っていたといえるだろう。近代化がそのまま西洋化であった時代には、西洋文化の元を理解すべく、SR は日本でも高等学校や大学の教科書となり、広く読まれた<sup>1</sup>。こうして明治・大正・昭和初期まで関心をもたれた SR は、おびただしい古今の文献の引用、当時の状況に通じていなければ理解が難しい皮肉や諧謔などからくる特異な文体ゆえ、文学界では表現方法に着目した研究成果が豊富である。

本稿では、それと視点を異にし、SR にカーライルが込めた思想的目標と、その実現のために構想した道筋に着目する。それは、以下のように要約できるだろう。

- (1) SR は、人々の心の改革を通じて社会改革を目指し、その到達点に世界平和を置く。
- (2) そのために、人々が身近に敏感に関心を寄せる「衣装」と「身体」の関係をモデルに文明が生み出すあらゆる事物を説明する。
- (3) 次に「衣装」と「身体」による文明論的モデルを「自然」と「神」という超越的モデルに連続させ、そこへ関心を引き寄せる。
- (4) その連続は、「衣装」と「身体」、「身体」と「心」、「心」と「神性」という人間が持つ外側と内側の入れ子構造において、「神性」が「神」と同質であるがゆえに真実であると考えている。
- (5) したがって、誰の心の中にもある「神性」をいかに磨きだすかが改革の核心である。

以上のことから、もしも、SR の読者が社会改革を望むなら、自らの心に存在する「神性」を磨きだそうとし、同時に自らの仕事あるいは、社会への働きかけによって、人々の心の中の「神性」を磨きだすことを望むことになるだろう。実際、そんな読者に応えるまでもなく、SR には、一時代を画するほどに目覚ましい働きによって自らの仕事を果たす存在を、「神」の言葉を人々に伝える「英雄」として描いている。SR においてカーライルが挙げる「英雄」は、具体的には、宗教家、詩人、哲学者である。まさに言葉を通じて人々の心に働きかける役割を持っている。しかしながら、同時に、SR の要所においては、文明論的「衣装」が超越的存在に極まるのは、実は時代に即した様式によってつくられた建築であることが示されている。

遠藤新（1889-1951）は、そこに感動し、建築家としての「英雄」でありたいという強い望みをもって、東京帝国大学建築学科への入学を果たしたと考えられる。そして、上記（1）～（5）は、生涯建築家としての信条であったと考えられる。その遠藤が、学生生活の集大成として取り組んだ卒業研究を、最初の創作論的建築論として考察するために、遠藤の教育環境を確認するうちに、

思いがけず夏目漱石（1867-1916）が浮上した。建築史家で建築家でもある伊東忠太と美学者・大塚保治の様式をめぐる論争は、遠藤の入学する2年前のことだった。伊東は建築学科で教鞭をとっていたが、大塚もまた美学を講義していた。一方、大塚と漱石は懇意、しかも、漱石は、当時建築界に君臨していた辰野金吾とも交流があった。そして、論争の発端となった伊東忠太の最初の建築様式（style）についての進化論は1909年、その2年前に漱石が発表した『文学論』は、やはり進化論的に英文学の文体をとらえていた。さらに、漱石もまた、カーライルのSRの思想的目標や実現に向けての構想に関して真摯な読者であることが、「中味と形式」という1911年の講演に伺えた。しかしながら、何よりも注目されたのは、『文学論』にSRの影響が垣間見えたことが理由である。

漱石は、言うまでもない明治の文豪であり、『吾輩は猫である』から始まる多くの名作を晩年の10年間で世に問うた。同時に漱石は、小説家であるだけでなく評論家であり、英文学者でもあった。『文学論』（1907）、『文学評論』（1907）、『文学形式論』（漱石の教え子が編纂、1924）などを残している。これらについて、SRを通じて注目することになるとは思いもよらなかったが、文学に書かれた認識的内容（F）とそれが伴う情緒（f）とを文学の最小単位として、日本人にとって「英文学とは何か」に答えようとした。対象は、建築ではなく、文学であるが、『文学論』の執筆は、『吾輩は猫である』や『虞美人草』などの執筆と同時期であり、創作論としての性格が既往研究において指摘<sup>2</sup>されている。しかしながら、SRが内容としてもつ（1）～（5）の道筋を視点とした考察はあまりみられない。

ところで、漱石は、英文学を専攻する前は建築家を志していた。漱石自身、建築から文学への転向の経緯は、度々、随筆や講演録<sup>3</sup>で語っており、後に考察する。それが前述の大塚保治や辰野金吾との関係に微妙に影響しているのではないかと思う。漱石と建築との関係については、若山滋、川床優らの一連の研究<sup>4</sup>がある。しかしながら、これらについても、SRからの視点を探することはできなかった。

漱石の場合、建築家になることをあきらめて英文学を志すようになってからSRと出会っている。また、建築家になることをあきらめたからといって、建築への興味を失ったわけではないことは、若山、川床の考察から明らかである。したがって、漱石がSRに強い影響を受けたならば、SRにおける建築のとらえ方にも、深い関心を持たざるを得なかったであろう。社会的存在である建築芸術に取り組む際の覚悟として、若い時期に何が大切なのかを、遠藤と漱石の事例は端的に物語っているのではないか、というのが、本考察の背景にある問題意識である。

なお、漱石が『文学論』を世に問うたのは、1907年であった。遠藤の卒業論文より7年早い。間接的にせよ、1917年に亡くなった漱石と1914年に卒業論文を書き上げた遠藤という22歳年齢差があり、世代の異なる二人の邂逅は、1915年に遠藤が読売新聞紙上に発表した「東京停車場と感想」（1915.01.27-31）ではないかと推測している。漱石は、そこに、自分があきらめながら、SRに読み取った建築の理想を、辰野金吾の国家的建築を批評する若者の文面にくみ取ったであろう。

## 2. “My Friends in the School(3)” にみるSRの影響

夏目漱石（1867-1916）が、第一高等学校時代（1888.9-1890.7）、トマス・カーライルのSRを相当読み込んでいたことが、カーライルとの会話を描いた英作文“My Friends in the School (3)”<sup>5</sup>から分かる。塚本利明（2003）はこの英作文について「漱石の文学、漱石個人を考えるうえでは、

この短い作文は極めて興味深い要素を多く含んでいる<sup>6)</sup>と述べて、初期における影響を指摘している。このことを、前述したカーライルの「衣装」と「身体」によるモデルに倣い、文体による表現（見えるもの）と表現内容（見えないもの）の視点から考察したい。あらすじを追っての考察はいささか冗長であるが、漢籍と大和言葉に通じ明治と共に年齢を重ねる途上にあった日本人としての「夏目金之助」の誇りが、英文学を志すにあたっての苦悩として見出せるだろう。

寮の書齋で英作文の宿題をするうちにうとうとしていた青年漱石は、ドアをノックする音で目が覚める。ドアを開けると、見知らぬ男が立っていて、驚いた漱石が恐怖と闘いながら名前を尋ねると「君は旧友の顔を忘れたのか。」と逆に問いかけられる。その男は、数日前に英語の先生が、自分の真似をするなと警告したことを持ち出すのである。それこそがカーライルのことだったことを思い出し、漱石は、「いかさまだ」とやり返し、死んだはずの人間がいるはずもないことを前提に「カーライルは死んですでに8年になる」と、答える。当時22歳だった青年漱石は、大文豪カーライルにあこがれてその文体を真似ていた。深い親しみを感じていたことが「旧友」という言葉から伺える。もちろん、8年前に亡くなってこの世にはいないことも知っている。

漱石の答えに対して、さらにカーライルは、「君は、靈魂の不滅を信じないのか。」と問いかける。そして、ジョセフ・アディソン（1672-1719）の悲劇『ケイトー』（1713）の一節「自然界で地水火風がひしめき合い、物質が壊れ、世界が瓦解する中で傷つくこともなく」を吟ずるのである。これは、注釈<sup>7)</sup>によれば、カーライルがSRにおいて、「世界の瓦解こそあなたのおかれた環境であり、都合よくあなたを運ぶ潮流であった<sup>8)</sup>」と形を変えて引用したその元だという。主人公トイフェルスドレックが、逆境に負けず自らの「衣装哲学」を打ち立てていく様を描いた場面である。SRの特異で難解な文体は、イギリス・ドイツをはじめ古今の文物に依る多彩な引用にも起因している。SRのこの部分は、あまたの引用の中ではどちらかといえばさりげなく、目に留まりにくい箇所のようにも思われる。しかしながら漱石は、カーライルより前の時代のアディソンのこの詩句に、その源流を見ていたことが伺える。引用された部分は、自然界と人間の関係を中心にみれば、「天の時、地の利、人の和」を理想とする孟子の儒学思想を連想させる。漱石は、一高入学以前には漢詩を学び、文壇で活躍して以降も漢詩を好んで吟じていた。アディソンやカーライルには、漢詩的「天地人」に似た精神性を重ねていたのかもしれない。いずれにしても、物質世界あるいは世間の激しい変転に絡めとられることなく自らの道を生きようとする人間の強い意思を、漱石が「靈魂の不滅」という表現に繋げているところが注目される。

さらに、もしも「靈魂の不滅」を信じるといふのなら、あの世にいるカーライルが、現世の人間である自分とどうかかわるといふのか、とさらに青年漱石は問う。それに対して、カーライルは、自分が学生寮の書齋にやってきたのは、自分の文体（style）の真似（imitate）をすることがいかに危険かを知らせるためだと述べるのである。自分の文体は非常に秀でていると評価されはするがいわゆる英語らしくない<sup>9)</sup>ので、真似をすることはカーライルの戯画（caricature）に落ちることであり、「君が虎を描こうとしても、貧相な猫になるだけだ」と諷める。英文学を学び始めた漱石が、英語らしくないカーライルの文体に強い魅力を感じていたこと、それを真似ることは、滑稽に落ち、力強い独創に至らないという明確な自覚をもっていることが分かる。後に、神経衰弱の治療として執筆を勧められて書いた第一作が『吾輩は猫である』つまり「猫」を描いていることと不思議にも符合して興味深い。

以上のような会話の後、突如、カーライルは、巨人となって無限の空間に消えた後、漱石は、夢から覚める。そして、英作文の宿題についての着想を得て1時間足らずで書き終えるのである。

もちろん、実際は、英作文の想を練ろうとして眠りに落ち、カーライルと夢の中で会話し、そして夢から覚め、英作文を書き上げる、という筋書きの英作文なのである。この作文を書く前と書き上げた後の自分まで含めた構成は、劇中劇に真実を描く世阿弥の夢幻能が想起される<sup>10</sup>。漱石の英作文では、現実の自分、作文する自分、夢の中の自分とカーライルという入れ子構造がみられ、特に夢の中でのカーライルとの会話に核心がある。一方、SRは、人間を「衣装」、「身体」、「心」、「神性」の入れ子構造でとらえ、「神性」に核心がある。漱石は、カーライルの人間のとらえ方を、自らの英作文の構成に投影しているのだ。教師からの忠告や夢にカーライルを見たことは事実としても、それを1時間足らずで英作文にまとめ上げるための入れ子構造は、おそらくは、理論理屈ではなく無意識の産物であったと想像される。無意識にしまえるほど、カーライルに影響を受けた証といえないだろうか。

一方、漱石の英作文の構成が3重、カーライルの人間の構成が4重と、重層する数が異なるところに、漱石の悩みも伺える。この作文の最後に、漱石はカーライルについて次のように記す。「偉人の作品を読み、偉人の卓見に同感し、偉人の才能に畏敬するものは、偉人の友なのではあるまいか。なればカーライルこそわが友、カーライルこそわが英雄だ。」この「英雄」とは、神の言葉を受け、人々に伝える「英雄」、つまり、カーライルがSR第3巻第7章「有機的繊維」で定義づけた「英雄」であり、漱石の姿勢は、「英雄」に感化された人がとる「英雄崇拜」にあたる。ここには、カーライルの文体を真似るのではなく、SRにカーライルが託した「靈魂の不滅」を自分なりに吟味しながら、英文学を研鑽しようとしている漱石の姿がある。物質的・世間的な道を選ばなかった漱石の決意がうかがえ、注目されるのである。

しかしながら、自らの英作文の最後を、漱石は、次のような独白で締めくくっている。「あれは本当にカーライルだったのか、それは、消化不良の肉片のせい、それとも生煮えの馬鈴薯のいたずらか。騙されたのか！」

ここには、英雄としてあこがれ、友として信頼するカーライルに対して、同時に漱石が持った強い懐疑がむき出しに表れている。漱石は、生来胃弱で、49歳の生涯を閉じることになった死因も胃潰瘍つまり胃にあった。同様に胃弱であったカーライルに対して、親しみをもってたとされる。変えることができない身体の弱点によって自らの精神の消化不良を暗喩し、西洋文化を鵜呑みにしていい気分になっているだけではないかと、日本人としての心中の懐疑を露わにしている。これは、近代化が西洋化であった時代を生きた明治の人々の本音や不安の代弁とも受けとれる。塚本が指摘するように、後に標榜する漱石の言葉「自分本位」が表出する根幹は、22歳の漱石に確かに見て取れる。

同時にここまでカーライルを崇拜しながら、懐疑を持つのは、漱石の性格だと言ってしまうとそうかもしれない。しかし、一つには、カーライルがキリスト教徒であることにも起因しているのではないか。まず、最後の独白は、SRにおける「身体」と「心」という視点、つまり、治癒が必要な身体と社会的通念に縛られた心の関係を描いた遺作『明暗』を思い起こさせる。このこと自体、カーライルを英雄とし友としつつ、同時に持たざるを得なかった懐疑は、晩年まで漱石に持ち越されたことを示唆するように思う。

カーライルはプロテスタントの一派であるバーガー分離派の家庭に生まれ育った。生まれも育ちも敬虔なキリスト教徒だったのである。しかし、19世紀は、科学を基盤とした工学とそれゆえ実利の時代でもあった。エジンバラ大学に進学したカーライルは、多感な時期を社交華やかな首都エジンバラで過ごすことになる。それは、自らの信仰への懐疑の起点でもあった。懐疑とそこ

からくる自己否定に苦しみ、やがてそれに打ち勝ってSRを著すに至る。そこで繰り広げられる人々の行動は、後のSRの「衣装」と「身体」との関係つまり「衣装哲学」を生み出すもととなった。SRには、他宗・他教に開きながらもキリスト教、特に『聖書』を最上とするカーライルの姿勢が見て取れる。目に見えない霊的なものが目に見える形をとるとはどのようなことなのかを問うカーライルのSRは、一見、カントやフヒエの影響で説明できそうにみえるが、少し深く読むと、その根底にあるキリスト教の存在が浮上してくる。

人間の「入れ子構造」の核心に位置する「神性」ではあるが、キリスト教徒ではない漱石にとって、実は、カーライルの「心」と「神性」との間には、「キリスト教信仰」があり、それが越えられない境界線となったのではないだろうか。つまり、漱石は、SRに触発されて、文学における文体や表現について考えるだけでなく、その根底にある宗教の存在とも向き合わねばならなかった。それは、意味の表れ、象徴の問題にも及ぶであろう。例えば、塚本（2003）は、漱石が、ドアのノッカーに用いられた「ライオン」または「獅子」という言葉を避ける傾向がありわざと「鬼」と訳していると述べている<sup>11</sup>。密教では、獅子は、大日如来・文殊菩薩・不動明王の乗り物である。ノッカーに用いられたライオンが魔除けであれば、それは鬼の階層に位置するという判断が働いたと推察される。また、漱石は、キリスト教を世界宗教、仏教を偶像崇拜とする捉え方を不快<sup>12</sup>と感じていたと思われる。また、儒教、道教、仏教についての相当の素養と日本文化の基盤への誇りから、漱石にとってのキリスト教の形式と内容の関係は、単純ではなかったのではないだろうか。

一高時代は、正岡子規との交流によって、自ら俳句・短歌などの詩作や、寄席・落語など日本の伝統的娯楽芸能の楽しみを豊かにしつつあった時期でもある。同時に、建築学から英文学に専門分野を変えて研鑽した時期である。漱石が建築を選択したのは、人間性という面で問題があると自覚していた自らの性格をよき方向へと変革することなく、身に着けた技術により仕事が得られという理由からであった。それを英文学へ転換させたのは、友人が、当時の時代・社会的状況では、志ある建築を実現するのは難しいが、文学的才能ある漱石であれば、長く読まれる作品を世に遺し得ると説いたことによる<sup>13</sup>。そして、英文字に転じた後の漱石は早速SRに出会うことになる。まさにそのSRにおいて、建築は前述のように特別な位置を与えられている。自らの打算を友の言葉から自覚して捨てた建築が、間を置かず深い真実の意味を持って漱石の前に立ち現れたことになる。もし、SRを通じて、カーライルとの心的なやり取りが後にも継続したとすれば、それは、常に建築という対象が漱石の意識の中で伴走していたことをも示唆するのではないだろうか。

### 3. 「カーライル博物館」におけるSRの影響

#### 3-1 イギリス留学とカーライル博物館の訪問

1889年の英作文から11年後、漱石は、東京帝国大学を卒業し、愛媛・熊本での教師生活を経て、国費によりイギリスに留学<sup>14</sup>、ロンドンを拠点とした。ケンブリッジやオックスフォードを避けたのは、そこで紳士としての嗜みやゆったりとした時間の使い方を他の学生と共有することが経済的に困難であり、英文学研鑽の目的からもとより望まなかったためだという。経済的かつ学術的理由から社交界になじめなかったこともまた、エジンバラ時代の若きカーライルを想起させる。

漱石は、そんな留学期間に旧カーライル邸を訪ね、帰国後、「カーライル博物館」（1905.1）として『学燈』に発表した。4回訪れ毎回来訪者名簿に署名したとの漱石の記述については、事実かどうかをめぐって諸説あるが、フランスではパリ万博に3回通っていることから、カーライルの居

宅にそれ以上の意味を込めた表現なのかもしれない。来訪の際、漱石はカーライルの蔵書録を写し取っており、後進のためにと、『学燈』（1905.2）に紹介していることも知られている。カーライルについて知り抜こうとの熱意の表れではないかと思う。

一方、2年間の留学の後半で、漱石は、文学についていかなる成果をえるにせよ、西洋流を鵜呑みにしないことを前提にしようと「自己本位」の姿勢での着手を決意する。それは、カーライル博物館を訪れた時期<sup>15</sup>に近い。この姿勢は、SRの「無関心の中心」において周囲からの疎外感からくる自己否定を、自らが勇気をもって否定したトイフェルスドレックの姿勢と重なる。そして、漱石は、日本人にとって英文学とは何か、社会においてそれはどのように生まれ、成長し、衰退するのかを明らかにしようと決意する。これは、当時の生物進化論や社会進化論と重なるところがあるが、文学を永遠の生命に見立てると、SR第3巻第5章「不死鳥」において、時代の変化によって、不変の生命（不死鳥）は、滅亡しつつ生成するという考えとの共通点が見出せる。そして漱石は、英文学の書物は目に触れないところに仕舞って、それ以外（例えば科学・哲学など）の文献を集めて文学とは何かを自問したという。この時、細かい文字で書いた原稿が5,6寸にも達し、同時に、極度の神経衰弱により精神を患った。後の文豪漱石の研鑽の凄みの一端がこの事実から伺える。SRは、思想的文学作品として描かれているが、この時の漱石は、文学書を読んで文学がいかなるものかを知ろうとすることは、「血で血を洗う」手段と信じ避けている<sup>16</sup>。この表現の真意は再考の余地があろうが、ゲーテをたびたび引用するカーライルとは異なる方法を選択したと捉えられるのではないだろうか。

なお、日本人では漱石が初めてであると自ら記したカーライルの居宅が博物館として公開されたのは塚本利明（2003）によれば、1895年7月26日である。稲垣瑞穂（2004）は、来訪した日本人についての従来の説を整理している。まず、1888年9月12日に植村正久<sup>17</sup>（1858-1925）がまだ博物館になる前の旧宅に来訪している。植村は、内村鑑三（1861-1935）、田村直臣（1858-1934）、松村介石（1859-1939）を合わせプロテスタントの四村と呼ばれた。漱石は、キリスト教に懐疑的だったので、先の漱石の4回の訪問はこれに対峙しようとの意図かもしれない。さらに、翌々年の1890年には、後にカーライルを30回以上読んだと回想したやはりキリスト教徒の新渡戸稲造（1862-1933）が来訪している。漱石とちがって、四村だけでなく新渡戸稲造もまた、もと士族出身であった。漱石は、キリスト教徒か否かだけでなく「日本人として」という国民国家的感覚に、微妙な違和感を持っていたのかもしれない。なお、漱石が訪れた前年の1899年3月7日には、漱石と学生時代から懇意で、漱石が留学した1900年、すでに東京帝国大学美学講座の初代教授となっていた大塚保治<sup>18</sup>が訪れている。懇意だった大塚をはじめ、漱石来館以前に、これだけの日本人が訪れていた。

### 3-3 「カーライル博物館」における煙突の描写

「カーライル博物館」については、多くの既往研究がある。塚本利明（2003）は、漱石が帰国後の執筆に際して用いた資料についての考察を整理し、「カーライル博物館」の材源<sup>19</sup>に紹介している。それによれば、漱石は、カーライル博物館で購入した“Carlyle's House Catalogue”に書かれた内容を題材に「カーライル博物館」を執筆したのだという。「カーライル博物館」には、カーライルの写真から伺えるその人となり、カーライルが文章の着想を得た庭、窓からの風景、書斎などとの関係、自らデザインした本棚などが描かれている。これらの記述は、SRにおける第2巻第2章「牧歌的生活」や、第3巻第10章「洒落者集団」に描かれた住まいの室内や庭と、住み手の生活

ぶりと服装、さらにはその生活信条との密接した関係を思い起こさせる。「住宅」にスケールを拡大した「衣装」、「身体」、「心」の入れ子構造がみてとれる。漱石は、親友であり「英雄」であるカーライルを、カーライル自身がSRで提示した視点から、客観的に描写しようと試みていると見ることができよう。特に、「洒落者集団」の章は、前章で人々の心に「神性」が獲得され社会革命が起き、「神性」をもった建築が新しい様式をまとって立ち現れることへの希望を示しつつも、まずは、人々の生活から見てみよう、と促して始まる章である。このことは、カーライルが、一貫して真の改革は、社会の変化に先立って、人々の心におこると考えていることを示している。

漱石は、カーライルの居宅とその言説を対比させ、自らが空間体験を行った感想をかみしめるように重ねている。カーライルが住んだ当時、ロンドンの郊外であったチェルシーは、すでに霧のロンドンに取り込まれ、かつては見渡せた街の風景も、ウエストminster寺院、セント・ポール寺院以外、既に見えない。漱石は「1834年のチェルシーと、最近のチェルシーはまるで別物である<sup>20</sup>」と述べている。そして、カーライルの風貌については変わらず厳しいけれど温かさが感じられる人柄を感じているが、一高の英作文に描かれた「断崖のような額」を持った、から、一歩進んで「カーライルの顔は決して四角ではなかった。彼はむしろ、懸崖の中途が欠落して草原の上に伏しかかったような容貌であった<sup>21</sup>」と、重力に従った落下という特質を新たに加え、自らの足跡を時の流れと共に感じているようだ。1834年は、カーライルがチェルシーに引っ越してSRの執筆をつづけその連載が終了した時期であり、漱石が訪れた1901年との間に67年間の時がある。カーライル自身、時の経過に従って物事は変転するとSRで述べており、それが、漱石自身カーライルを鵜呑みにできない理由であると自分に言い聞かせるかのようである。

さらに、カーライルの居宅を四角く観じ、直方体の煙突に喩えていることが注目される。カーライルの住宅を評するとき、何度も「四角」が出てくるのである。案内人の女性の丸顔は、それと対比的に引き立て役としているようだ。そして、住居自体が煙突だというのである。漱石による煙突についての描写は、やはり、塚本利明が1907年の漱石の講演における「砲兵工廠の高い煙突」において、そこから上がる煙は、徳義的理想と合致した英雄的(heroism)情操を引き起こすことと、カーライルの居宅の煙突の比喩との一致を指摘<sup>22</sup>している。

ここでは、さらに、煙突が、SR第2巻第9章「永遠の肯定<sup>23</sup>」に重要な景観の一部として登場することを指摘したい。この章は、SRの中でも最も重要な章であることを、多くの読者・研究者が指摘<sup>24</sup>している。カント哲学に触発されてSRを書いたことは、カーライルも認めている。実際、第1巻と第3巻には超越論的(transcendental)という言葉が何度も出てきて、サミュエルエマソンの超越主義のもとになったとされる。カントが論述を避けた、世界の始まり、世界の果て、霊魂の不滅、神の存在などのテーマが、第2巻の主題である。それを、カーライルは、SRの主人公トイフェルスドレックの経験として描いている。つまり、疎外感からくる自己否定「永遠の否定」を克服し、さらに自我を滅除することによって得られる「永遠の肯定」へ、つまり、心の底にあった「神性」が前面に出てくる状態の描写である。そこでは、世界に温かく受け入れられた自らが、他者に対して無限の憐れみ(sorrow)と愛(love)を感じるという心の状態が描かれるのである。

注目されるのは、その時主人公が透視する景色である。それは、山々の間に抱かれた9つの村落である。カーライルはそこにみえる美しい城や白衣の令嬢たちに視線を向けながらも、さらに美しいのは、人々の暮らす百姓家とそこで子供たちに囲まれパンを焼く母親たちであるとよべる。そして、各家々に立つ煙突から上がる煙を通じて、人々の暮らしぶりや思いが、手に取るようにわかる、というのである。ここでは、煙突とそこから出る煙が、人々の日常の暮らしと行いを表

す象徴なのである。「神性」つまり「神」と同じ質を心に持った主人公は、そのようにして、眼下に点在する村々の、さらにその家々の煙突を見て読み取り感じ取っている。

なお、この煙突のもとで行われる炊事つまり生命の営みの描写は、傷心の主人公が「永遠の肯定」に至る前の漂泊においても経験<sup>25</sup>されている。その時は、古い住居からなる街に二千年前に行われた炊事の跡が、地上からの視線で描かれており、やはり煙突が、人々の生命の営みの象徴としてとらえられていることが分かる。

さて、「カーライル博物館」に戻ると、カーライルの居宅は四角四面の煙突そのものだと漱石はいう。しかもカーライルは家の中で最も天に近い屋上部分に、自らの書斎を増築した。ここから、漱石が、カーライルの生命の全ての営みは、考え、書くことにある、しかもそれを生真面目に四角四面に行っていた、と捉えていたことが分かる。漱石にとってカーライルは、天に向かって書いているように思われたのだ。もちろんこの行為は、大地の上で行われるのだが、古来中国では、大地を表すのは四角<sup>26</sup>である。道教、儒教に通じ、漢詩や中国の思想にも造詣のあった漱石は、大地が盛り上がり、天に近づく様を思い浮かべ、カーライルの住居を四角い煙突に喩えたのかも知れない。SR 第2巻では、主人公の漂泊の描写に何度も山の景観が出てくる。山とは、大地が隆起し天に近づいたものだからであろう。また、煙突の煙は、カソリックでも、例えばローマ教皇の投票結果を知らせる、キリスト教における教義として目立った専門性があるのかもしれない。

いずれにしても、漱石は、SR 第二巻を真剣に読み、煙突が持つ象徴的意味の重要性を心に刻み、後にカーライルの居宅の描写に用いたと考えられるのである。

#### 4. 『文学論』とSR

イギリス留学時の孤独な研鑽の成果は、帰朝後就任した東京帝国大学での英文学の講義の元となった。それらは、推敲の後、『文学論』（1907.5）と後に弟子が編纂（後述）した『英文学形式論』（1924.9）として出版された。漱石は、帰国後、『文学論』のための原稿を準備している間、神経衰弱を患っていたという。書くことに賭ける思いが、病となって現れたのであろうか。

『英文学形式論』の方が、順序としては先におこなった講義（1903.3-6）をもとにしている。刊行の経緯は、漱石全集第13巻<sup>27</sup>に詳しいので、少し見ておきたい。原稿が紛失していたのを、教え子たちがノートを持ち寄り、講義内容を再構築した。タイトルも、責任編集した皆川正禧が内容に即してつけた。漱石自身は、「文学の一般概念」と「文学の形式」から構成している。まず、「文学の一般概念」において、文学を「形式（Form）」と「内容（Matter）」に分けた<sup>28</sup>。次に、「文学の形式」では、「形式の列挙によって一般概念を暗々裏に与え」、主に18-19世紀の英文学からの文例をあげ解説する。それによって、「日本人は英文学の形式をいかなる程度まで解しうるか、（中略）その目的のために形式を分類した」というのである<sup>29</sup>。日本人が英文学を読み味わうという明確な目標をたてていることが注目される。その結果、日本人が面白い、趣味（つまり美的好み）に合うと感じる文学は「A われわれの理解に訴えて無理なく分かる普遍的なもの、B 理解力、音調に訴えるもの、刺激的・珍奇なもの、C Bの中で特に重大なもの」に分類できるという<sup>30</sup>。いわゆる神話、叙事詩、抒情詩、小説など形式の種類に分類をせず、文学が読者に及ぼす効果にのみ着目して分類している点が注目される。

『英文学形式論』の「形式」に対する「内容」は、先に出版された『文学論』において考察される。やはり、帝国大学での講義（1903.9-1905.6）がもとになっている。『文学論』では、冒頭で「文

学的内容の形式」を (F + f) とする。F は、作者の焦点的印象または観念で、f は、これに付着する情緒」と、定義づける。言い換えると (F + f) は、F (認識的要素)、f (情緒的要素) の結合であるという。簡単な例としては、花や星の認識 F とそれらから感じる情緒 f とである。そして、(F + f) によって文学の「内容」のすべてが説明できるとしている<sup>31</sup>。

つまり、漱石は、文学が喚起する情緒を視点に、「形式」と「内容」に分け、さらにその「内容」をあらゆる「文学的形式内容」としての (F + f) とする。そして、認識 F に付随する情緒 f による効果を文学の本質とみるのである<sup>32</sup>。(漱石全集第 14, pp.138-147) これは、SR において、人間をとりまく事象全般を「衣装」と「身体」とみなし、さらに「身体」を「身体」と「心」に分けていることと、二元論的な入れ子構造が共通している。さらに SR では、心において「自我 (self)」とそれを取り去って現れる「神性」に分けるのであるが、『文学論』において、f はそれ以上には分かれぬ。あくまでも F に伴う存在として多様な性質を与えられ、そこからさらに多様な (F + f) が得られる。それをを用いて豊富な文学の事例を演繹的に説明するのである。

漱石は、超自然的 F としての「神」に付随する f が、宗教を重んじなくなった現代人に未だに大きな効果を及ぼすことを認めつつも、あくまでも多数の f の中の一つとみなしている。その際、キリスト教を最高とするカーライルでさえ、人間の心の闇をいかんともし難いと述べた言葉を引用している<sup>33</sup>。この箇所におけるカーライルの解釈をめぐっては、賛否が分かれるところであろう。しかしながら、賛否以前に、漱石の関心は、心に人々が持つ「神性」ではなく、消すことのできない闇にある。晩年の『明暗』が、極論すれば我執をテーマとすることに符合する。ここにおいて、漱石が、そこから目をそらさないところから始めているまさにその姿勢が、カーライルと共通しているといえるだろう。SR において、カーライルは滅却の道筋を冒頭の (1) ~ (5) のように示したが、『文学論』の漱石には、示しえなかった、という違いがあるだけであろう。

『文学論』で、漱石は、前述のように、文学が、社会的、心理的にどのように誕生し、成長し、衰退・誕生するのかを描こうとした。その際に、ダーウィン、スペンサー、コントなど 19 世紀後半に注目された生物学や社会学系進化論を参照している。そして、F は、個人から集団による共有に拡大され、f と共に考察している。漱石による文学の変化は、19 世紀の進化論同様、最終目標は無く、文体の変遷のみの観察に集中している。変化を導くのは前の時代の「暗示」(形式が示す傾向) を読み取ってそれを発展させる「先覚者」である。カーライルが、世界平和に至る変転の歴史をけん引するのは神の言葉を人々に伝える「英雄」であるとするのに対して、周囲の環境の諸要因のみでなく、一時代を画する主体として、特別な人間(「先覚者」)として想定しているところは共通している。

さらに漱石は、進化発展の過程が漸進的であることを、文学から逸脱した事例を挙げて説明している。それは、英領ニューギニアに見られる原住民の生活の進化の表れとして Haddon により例示された鱈魚表現の漸進的变化で、写生的図案から幾何学的図案になる過程を例示している<sup>34</sup>。そして、一段階ごとの変化は、前段階の暗示を受けてのことであり、それは同時に漸進的で、写生的図案から突然幾何学的図案に至ることは決してないとも述べている。建築装飾の変化発展に関連し伊東忠太の建築進化論(1909)との共通性がみられる。このことは、機会を改めて考察したい。なお、漱石自身は『文学論』について、1911 年の講演「私の個人主義」<sup>35</sup>において、かなり厳しい自己批判をしている。

さらに、晩年、漱石は「則天去私」の言葉を弟子たちに遺している。字義に即せば、私つまり「自我」を取り去り天の神そのものとなった心の状態であろう。SR の「永遠の肯定」における「自我」

を滅却した「心」の状態と共通する。もし『文学論』を書き直したら、別のものになったと考えていたかもしれないとのべていることと呼応する。晩年に執筆した『明暗』は、人間の我執を描いた小説といわれている。そうであるならば、作者として登場人物の我執を見つめ描く自らは鏡のようではなければならない。その意味で自分の「我」を取り去った「則天去私」を、晩年、自らの理想の到達点としたのではないだろうか。

さて、SRにおいて、建築は「衣装」の窮まったものであった。漱石は、第一高等学校予備門では、建築科に籍を置き建築家を志していたことが知られている。建築から英文学への転向については、東京高等工芸での1911年の講演<sup>36</sup>以外でも、何度も講演・随筆などで言葉にしている<sup>37</sup>。人格より腕を信じて人か集まる医者例を引き、人付き合いが全く苦手な性格だが美しいものが好きだったので、技術を極めて自然と人が集まる建築家になろうと考えた。しかし、哲学科の友人から、今の日本で、建築の理想を求めるのは無理があり、100年を超えて残る文学を追求することを勧められ、自分の建築選択理由について反省したというのである。ここには、自分自身を改変することなく建築への志を抱き、人間としての成長と直結した理想がないかつての自己への批判と、後進への戒めが込められているように思う。川床優（2005）は、漱石の言説に特に若い人たちへの優しい人間性を読み取り、本来デザインの仕事は人への愛なので、それがデザイン論的言説になっているとみている。英文学に転向した漱石は、その後SRに出会い深く傾倒していく。建築を選んだ時期の自分を顧みて本来の建築や建築の在り方や可能性についても同時に考えざるを得なかった結果でもあろう。

例えば、漱石は、1914年1月に東京高等工芸（現・東京工業大学建築学科）で「無題」として講演をしている。遠藤が、卒業論文・設計に取り組んだ年である。雑誌『建築画報』の編集者は、多く高等工芸の卒業生<sup>38</sup>からなっていた。漱石自身が『硝子戸の中』において、高等工芸からの再三の要請を断ってきたがようやく引き受けたと語っている。

漱石は、この時、もともと建築家を志した自らが文学に転向したいきさつから説きおこし、そこから、建築がもつ芸術的性格についても語っている。そして、芸術家としての「自己本位」については、遡る講演「道楽と職業」（1911, 明石）において、自らの考えを次のように述べている。「私が文学を職業とするのは、人のためにする、すなわち己をすてて世間のご機嫌を取りえた結果として職業としているとみるよりは、すなわち己のためにする結果すなわち自然なる芸術的心術の発現の結果が偶然人のためになって、人の気に入っただけの報酬が物質的に自分に反響してきたのだと見る<sup>37</sup>」と述べている。芸術家としての漱石に「自己本位」の意味が「己のためにする結果としての自然なる芸術的心術の発現」として端的に示されている。そこには、「永遠の肯定」の心における様態である「他者に対する無限の憐れみと慈しみ」が、芸術家としての漱石にとっては、第一の目標ではないことがわかる。そこに漱石の懐疑の核心が示されている。小説に対する漱石のこの自負を込めた見解は、芸術における芸術家の「利他」と「利己」とについての考えを代弁しているのではないだろうか。

さらに漱石は、もし、反響がない場合、世間に反しても芸術的心術の発現に執着すると述べている。ここには、社会が受け入れるかどうかにかかわらず、自己本位を貫かねばならない芸術家としての姿が描かれている。ここでの自己と世界との関係は、「神性」が前面に顕れた「永遠の肯定」の心のもう一つの様態である「世界からの温かい受容」からも、ほど遠いと思われる。

## 5. 結び

遠藤の建築論の起点は、卒業研究であると考えている。その環境的要因を探すうちに、漱石の『文学論』にSRの影響が強いことがみてとれた。そこから、漱石について、SRと一高時代の英作文、「カーライル博物館」を考察することになった。そして、「親友」とし「英雄」ともしてきたカーライルへの信頼と懐疑が半ばする明治の文豪のおそらくは苦悩の核心と呼びうるものに触れることになった。

文学と建築は「利他」と「利己」の内実が違うのであろうか。このことを考えることは、建築は芸術なのか、建築とは何か、という、遠藤が「建築論」、「建築美術」において、1926年に自問した本質的な問いへの答えを得ることでもある。その時、漱石の残した言説は、かなり大きな示唆を与えてくれる。また、漱石の言説をSRの内容と対照させることは、SRが「心の改革」と呼んだものを、漱石がどう引き受けているかを考えることである。それは、遠藤が建築において引き受けたものに光を当てることにつながるであろうし、遠藤の建築論を読み解く鍵ともなるであろう。見解は違うにせよ、二人ともSRから自分なりに得た内容を、それぞれに実践した成果が、そのまま作品となって結晶化しているように思うからである。

また、漱石による「利他」と「利己」についての考え方の変化は、己の腕と共に内面を磨いて作品をつくる過程で「則天去私」に至るところに表れたと推測される。それはまた、小説家としての独創性と社会性との関係を示すものでもあろう。この筋道を明らかにすると、漱石が、実は建築に何を期待するに至ったかが明らかになると思う。それは、建築論における「建築以前」を明らかにして建築を考えるという過程の困難を暗示するような作業である。

したがって、遠藤の「東京停車場と感想」を、漱石はどのように読んだのか、についての考察は、おのずと機会を改めざるを得ない。

## 注釈

- 1) 塚本利明によれば、日本におけるSRの最も早い紹介は、著名人の伝記・逸話を編纂したサミュエル・スマイルズの『自助論 (Self Help)』(1859)を通じてであるとされている。塚本利明、漱石と英文学—「漾虚集」の比較文学的研究、彩流社、2003, p.551  
中村正直による翻訳により『西国立志編』の邦題で1870 - 71年に刊行された。勤勉・辛苦・忍耐など個人の精神修養の目標を示す書として大きな影響力があったとされる。小学校から明治天皇に至るまで徳性涵養のための教育に用いられ、自由民権運動に影響を与えた国民的書物であったという。相馬中学時代の作文で、英雄になるためには「苦を忍ぶ」ことが必要だと述べた遠藤新も、小学校時代にはこの書に大きな影響を受けた少年の一人だったのだろう。後の第二高等学校時代の土井晩翠から、SRとHHHの大きな影響を受けることになる。
- 2) 佐藤裕子、漱石のセオリー—文学論の解説、桜楓社 (おうふう)、2005
- 3) 建築から文学への転向の経緯・理由を述べた講演としては「時機が来ていたんだ」、「落第」、「おはなし」などがある。(漱石全集、第25巻『一貫したる不勉強』収録) 服装から建築まで考察する姿勢は「中味と形式」(1911)にみられる。
- 4) 若山滋は、漱石の作品に見る建築・都市空間の特徴、当時の建築界とのかかわり (1993-1995) など、川床優は、漱石に言説に見る建築設計・デザイン的思考 (2012) について考察している。

- 5) 1889.6.15、漱石全集 26 卷、岩波書店、pp.447-444, pp.440-437 (和訳)
- 6) 塚本利明、漱石と英文学―「漾虚集」の比較文学的研究、彩流社、2003, p.551,11.15-17
- 7) 同上、p.438、土井晩翠は、「物体の破碎、世間の壊滅は汝の領域および洋々の潮であった。」(DB83)、なお、宇山直亮は「物の世界が打ち砕け、様々な世界が相打つことは、君にぴったりの気分であり、得手に帆を挙げたようであった」(UN72) と訳している。
- 8) 漱石全集 26 卷、p.438.
- 9) カーライルは、SR 著述の前、ドイツ文学に親しみ、特に晩年のゲーテと文通し多くの英訳をおこなっていた。そこから、名詞を大文字にすることから始まる独特の文体が生まれているといわれる。なお、やはりわかりにくいと評されたフランク・ロイド・ライトの文体にも共通性が認められる。
- 10) 塚本は、漱石の作品で夢を効果的に用いたものとしては、「夢十夜」、「薙露行」(一夢)、『三四郎』(十一)を指摘している。塚本利明、漱石と英文学―「漾虚集」の比較文学的研究、彩流社、2003, p.552
- 11) 漱石全集第 26 卷、岩波書店、1994, p.60, 11.2-4
- 12) 塚本利明、漱石と英文学―「漾虚集」の比較文学的研究、彩流社、2003, p.567
- 13) 今西順吉、漱石文学の思想 第一部 自己形成の苦悩、筑摩書房、1988, p.392-393  
欧州留学の船上で出会った宣教師がキリスト教を最高とし他宗を排他的にみる態度を批判し、あらゆる宗教を包括する根源的真理を自分は信じると述べている。これは、カーライルに通じる考え方ではあるが、SR において、カーライルはキリスト教を最高の宗教としている。
- 14) 漱石のイギリスの留学期間は、1900.9.10-1903.1.20、制作文を書き上げた日付は、1889.6.15 である。
- 15) 漱石は、カーライル博物館を訪ねたと、明治 34 年 8 月 3 日の日記に記しており、カーライル博物館の訪問者名簿にも一致している。留学期間のちょうど半分が 1901 年 11 月頃とすると、1901 年 8 月は、そこに近づきつつあったところといえる。
- 16) 漱石全集第 14 卷、岩波書店、1994, p.9
- 17) 日本におけるプロテスタントの指導者で、東京富士見町教会の設立(1907)に尽力、日本プロテスタントの中核的拠点となった。
- 18) 大塚は、漱石のイギリス留学後の帝大講師就任にも尽力した。なお、大塚は、帝大建築学科でも美学の授業を担当し、1909 年には伊東忠太と将来の日本建築の様式がいかにある
- 19) 塚本利明、漱石と英文学―「漾虚集」の比較文学的研究、彩流社、2003, pp.559-566
- 20) 漱石全集第 2 卷、岩波書店、1994, p.39
- 21) 漱石全集第 2 卷、岩波書店、1994, p.38, 11.9-10
- 22) 塚本利明、漱石と英文学―「漾虚集」の比較文学的研究、彩流社、2003, pp.573, 11.15-18
- 23) 宇山 220-234
- 24) 菊池裕、新井明は以下に述べている。宇山直亮(訳)、衣服の哲学、日本教文社、2014, pp.2,6
- 25) 宇山 205
- 26) 陰陽道の五大(地水火風空)、道教、バラモン教および、それを摂受した密教では、円は水、三角は火、四角は大地を意味する。
- 27) 漱石全集第 13 卷、岩波書店、1994, p.712-716
- 28) 同上、1994, p.202

- 29) 同上、1994, p.292
- 30) 同上、1994, p.292
- 31) 漱石全集第 14 卷、岩波書店、1995, p.27
- 32) 同上、1995, p.125, l.13-p.126, l.7
- 33) 同上、p.468, 図 A ~ F
- 34) 漱石全集第 16 卷、岩波書店、1995, p.581-615
- 35) 「無題」あるいは「おはなし」として紹介されている。
- 36) 談話「時期が来ていたんだ」、談話「落第」など
- 37) 雑誌『建築画報』の初期における編集者について 建築画報社の出版活動研究 2 / 川嶋 勝, 大川 三雄, 矢代 眞己, 田所 辰之助日本建築学会 建築歴史・意匠 (2019), 655-656 (2019-07-20)
- 38) 夏目金之助、漱石全集 16 卷、岩波書店、p.42, 11.3-7